

翻刻『捨小舟』

松田修

解題

二卷一冊。写（近世中期）。浮世草子。全二十三丁。本文十二行（序は十一行）。寸法二〇・三×二六・五×二七。作者都の錦（六戸与一）。鹿児島県枕崎市東鹿籠関氏藏。振仮名は朱と墨と二通あり。ともに本文筆写者とは別筆。今朱墨の別を立てず、必要と認められるもののみ生かし、翻字者の意見は行間括弧内に示した。虫損破損等は一字分を□で示し、二字以上にわたる時は（ ）の中に、（二字分）などと示すか、あるいは損傷部分の長さの概数を入れた。本文行割細字の箇所は原型を残したが、一六九頁のみ、分量の關係上、へゝを附し、一行に直した。句読は仮に施した。

西鶴没後、上方文壇でかなり重要な地位を占めながら、出府後無宿人改めにひっかかり、薩摩山鹿野金山・鹿籠金山で、強制労働に従事させられた都の錦の生涯については、古く水谷不倒、近くは浜田啓介氏の、あるいは郷土史家諸氏によって研究が進められているが、中で劃期的であるのは、野間光辰先生の業績である。戦争下に発表された「都の錦の悲劇」

(日本諸学振興報告取載)「都の錦獄中獄外」(国語国文等は、都の錦の多元的な作品が、当代文学の流れにおいていかに位置づけられるものかを論じたものであるが、同時に文学者もその書きの系譜上、きわめて特異な典型性をみせる、都の錦の精神的位相を闡明したものである。

都の錦は悲劇的な薩摩体験をどのように以後の人生に生かしたか、わけて流人生活中、彼が何らかの文学的根柢を、薩隅の地に止めえたかどうか、大きな興味を寄せられるところであるが、今回鹿児島大学教授大内初夫氏によって発見紹介された関氏蔵にかかる本書「捨小舟」は、まさに待望されたその一冊であって、実に貴重であるといわねばならない。

流滴が文学創造に結びつくことは、いわゆる貴種流離譚を度外視しても、日本文学史上の大きなテーマであって、菅原道真、後鳥羽院等、枚挙に暇がない。しかし、それら面正まがしい次元、あるいは伝統的古典的なレベルを離れ、一受刑者としてリアリスティックに、流竄流滴の生活を描いたとなると、極めてその数は少い。かつて紹介翻刻した「南方録」発見者立花実山の「梵字艸」など、がかるうじて思い起される。

本書は、都育ちの零落者、「浮かぬ舟」と「二の次」の対談の形式をとっているが、この二人が、共に都の錦の分身であることはいうまでもない。「爰に華の都より出生したる無宿あり仇名を二の次といひうかぬ舟と号す」など、筆のすべりであろうが、全く一人の人間についての表現である。冒頭は、悲惨な生活の実情を芽ち、あるいは、ほんの僅かなミスのために無宿人狩りという落とし穴におちこんでしまう社会的メカニズムの非情さをつき、一見の自虐諧謔を超えて、自照性を濃厚に示して、その意味では近代小説への早い歩みでありえたのであるが、筆が進むに従って、ありふれた、書き古された浮世草子の中に解消してしまっている。都の錦の生が挫折であるほどに、この一冊にも亦挫折の色が濃い。

なお本書発見・紹介の功は、全く大内初夫氏に帰するものである。本書出現によって、都の錦への研究が一段の進展をみせるだろう。ついでながら、本書と同時発見された「播磨相原」一冊は、都の錦自筆の可能性の極めて高いもの、東北大学本等との詳細な比較検討が望まれる。所蔵者関氏、大内教授、枕崎図書館の方々に謝意を素したい。

捨小舟

常盤か御茶を召上られてハ、平家の御隠居様も二度必悔、頼朝殿の御舎弟様も、静か□カケヤツ盆に二日酔して、破家ほかの名を芳野川に流し、陸奥ニ落着かるゝまでハ、無宿と成て雨路絶歩行給う事、是好色に依てなり。されハ無宿になるもの、多分ハ糶貧乏の張る故そ、能家（金ぼ）暮悟りて見よ、禿カムに毛か生れハ女郎に変し、傾城の果てか遣手に化る、一夜／＼の飛鳥川、乗合舟の揖を取か如し、あそこにも附、爰にも「二オ」附る、されハ人間の切売とは、是女郎の事か、凡ソ金山に住人、金をハ鷹取ツカミトリと心得なからも、金の大切なる原を尋に、烟喰ヘツベて廠糶という病をうけ、怠いやつと取出す玉金をひつくり返して、金玉の御用につかい捨るハ、益体ヤクタイもない事よ、抑浮気の半粹たち、いつも大卅日おほほそかの心になり、揚屋を借錢乞と心得、遊女（そうずむ）をハ葬頭（ほうづむ）河姥御前と思ひ給へ、虚うつつにはまりて、果は衣裳をはきとられ、丸裸に成へき事の笑止也と、色里ウハサの背語ウハサもするも、身ふるいかして、尤可畏オホヤツカナイ

「二オ」

つなかぬ舟の浪にかゝよふといへる

心にて、流人の上をのせしゆへか、世に

便なき事を、捨小舟と付ぬ

引たつる人もなきさの捨小舟

しつみもやらすうかいもなし

「二オ」

今時の女に夫一人守るものハすくなし、額に鑷子(ふぬぎ)当る程の男に、人の女房盗まぬもなし、それかそうしやとて、南瓜(てんか)の蠶マを切るやうに人の首か切らるゝ物に□あらず、本よりぬしなき女郎狂ひ、たとへ仕過しかあれハとて、終に六寸角を背負たる例もなし、随分ぬればち当りたる分にて、流人となるまでの事よ、抑、色の道ハ天地はつと開けそめたるより、定り来り、伊弉諾と申せし大尽の親方、天の浮橋□下ニテ陰神の手を握り、うまい事よと嬉しかり給う其(よノ字入カ)がりの一ツこりかたまり蛭子の宮を生給う、しかれ共、此御子三とせまで足立給わすとて、天の岩くす舟に乗せ參らせ、大海原に流し給ふ。今の流人の始是なり(三オ)後に夷三郎殿と聞えしハ、此蛭子の御事也、亦素盞鳥尊も、出雲の国に流されまします、すハや、神さへ遠流の身の、まして其外人の世に、菅丞相の古ハ太宰府に船をよせ、須磨や明石のうらめしき、涙にかほる君の上、名ばかり残る有明の、月より丸き坊様ボツたち、一宗建立の法然日蓮、何れも一度配所の住居、喰ねハひだるいといふ事を知て、磯に釣して命をつなかるゝとかや、爰に鹿籠金山に無宿流人といふもの余多有て、十八十国の寄合なれハ、其趣一様ならず、其科もまた各別也、昔給金一兩二分に一日五合(つち)の積、黒米を受て、酒ハ日に一升宛も吞たかる故、一年の切米を一月程の内のみなくし、三百六十日の内に三十六度宛ハ主を取替、或ハ町の手代奉公(三ウ)して、注連(しめ)の内御免なるそと御正月に宝引をしそめ、読(よめ)を始めて合になをし、後ハ是に□またるしとて、三枚(肩)形ておせくく、三ツは四粒の廻り胴、切め御座らぬはり次第、皆こいくと手を拍族(つちやぶ)、濡手て粟を颯(ふ)と思へと、終に蝦(エビ)て鯛を釣とられ、巾着の底を扣のミか、揚句の果にハ仕着の伊勢嶋、さんとめの帯まで、日の目を見ぬ仕合、願(ねが)以し此功徳ハ売物を引負、主親方に損を懸、或ハ耳のないむすこ殿の為に、親仁の臍くり銀をこかして、奥のしれぬ穴蔵に

納るに、二三度社（三度）ハ安房めかと子煩惱に迷ひて、伯母の佗言ても済メ、元よりの悪姓（悪姓）、もへ杭に火の付やすく、恋暮（恋暮）の
 焰消かたきから起てハ後、讓の家屋舗を売、九離切（九離切）られて無宿と成、夢に角共しらぬ火の筑紫の海の藻にすめる、音に
 「四オ」泣罪のはつかしく、人に面を赤米や、喰うく寂ハ雨露に、濡ぬはかりを飯の宿、雪のあけほのおもしろく、歌
 ハよまねと流人木屋、皆人丸と成にけりへ人丸といへるハ、寒中にも衣裳一つなれハ、足をのはして長くねる事なりか
 たし、仍（なほ）まん丸にねるゆへ人丸といへり、無宿□歌に、ほのくどあかしかねつる冬の夜ハあまり寒さに人丸となるく、
 爰に華の都より出生したる無宿あり、仇名を二の次といひ、うかぬ舟と号す、此二人同国なれハ、同気相求めて、常に
 水魚の交をなす、されはうかぬ舟くされ竹の窓もる月にこしかたを案し、つれなの世の中や、昔ハ小銭をつかい過して、
 九々の声、三五の十八と違しゆへに、今は鄙の山住となりて、姿ハ籬に伝（あまがま）ふ槿（あまがま）の日陰にしほむことく、昼ハ多葉粉の
 火も臍（へそ）から取、暮てハ燈を見す、常闇の家に衾（ふと）をかたしき、起きもせず、ねもせて夜をあかしかねたる折から、二の次
 に向い、お手前ハ人品「四ウ」を見るに、律義まつ法成仕出し、虫もふみつぶさぬ体常に、主有に女におとけ事もい
 「二分分」様子、ことに吾丈の手業にハ峰の松風もかよふ成る琴地に金銀をかきよせ、三味の音にハ人の心を引取て、め
 つたに銭をさらへよせ、夏ハすかし団扇の風に余所の宝を吹あつめ、冬ハ屏風をこしらへて、世界の情をたゝみ込ミ、
 此外小刀の及ぶ所、剃毛（剃）の到る所、一ツとして手に叶わぬ事なし、かゝる名譽の細工を覚えなから、広い都に相手なく
 無宿と成（二分分）ふハとふした事そや、二の次額に皺をよせ、身共か事を疑ひ給ふハ尤なから、貴殿にもまた一不審候、
 品形社生れつきたらめ、心ハなとかかしこきよりかしこきにも、うつさハうつすへき道理をわきまへ、古の教を以て、
 人をみちひきながら我をわすれて自ら「五オ」悪道（悪道）に遠近（とんちん）のたつきもしらぬ山ヶ野金山に押こめられ、山又山（やままたやま）に山廻（やままわ）し
 て、此鹿籠山にうつされ給う御身の上、生所ハしれと宿かなけれハ、山姥の落子かと思はれ、それおそろしく社候へ、
 うかぬ舟、いかにもそちの不審の如く、我幼少の時よりも朝に道を聞て、ゆふべく（ゆふべ）の燈（ヒョウ）に文を攪（ヒョウ）見ぬ世の人を友とす

る、心ハ昔にありはらの伊勢のなよか成る筆事のたとり、紫のゆかりの詞、あるハ夕貞の宿をうらミ、いはけなき田鶴の一声みゝにそふて、かの光る君の噂すれかたく覚えけるに、自然と風流の友たちの到来、真帆ならぬ言の葉に引かけられ、ふと色里に志をはこひそめて、けいせいのかりの情六根にしミわたりけれハ、おたまきに針(は)と(ま)ふるし、夜も昼も通ひ馴しまゝ、適伊藤源助(なまこ)が講席(こうせき)に望(のぞ)なから、二日酔のねむりに(五ウ)うかされて、論語を口説の文と心得、源氏湖月抄をハ、まゝよ通路の駕籠賃にせよかしと、価をやすく打売、日々に悪姓募(あくせいぼ)、道德の学問ハ薄くして、好色のつとめもはらなるよし、親者仁(おやよびて)の耳に入り、頓而公(やがて)に訴へ、勘道牒(かんとだつ)にしるされけるに依て、所の住吉も奈良さらし帷子一重に成てけれハ、鮎は酔て持子男ハ気てもつといへハ、適此儘(あはばれ)に朽ハせまい、一先江戸に下り、運を伝馬町にしるへの者もあれハ、渠(みち)を頼て上り本の板下書ても口一ツハ楽な事そと案しすまし、都をハ弥生半に立つゝく霞の末や粟田口、山の桜ハ盛ニて、跡に心や墨染の衣ハ着ねと目、仏かとみる普賢(ふつげん)二(二)字(分)、猛しと聞ケと虎の尾ハ、姿やさしき楊貴妃の宮の冠かと此形に思ハす南(都カ)□の八重桜、人とは見えて心中ハ同じ事かや大桜、返して見れ(は脱カ)「六オ」ばか桜かくうとましき身のはてを、あゝしんきやと悔め共、其了簡ハ遅桜、まだ旅なれぬ行先を、守らせ給へと日の神に、たのみを懸る伊勢桜、心ほそくも糸桜、最早恋路ハきりかやつ(二)字(分)江戶桜、路銀持ねハ道すから、喉緋桜に近江なる水口籠裏(かごり)をさし出し、勸進乞て行路を、またも三川の八橋に、田はかり残りかきつばハなしと我友誹林三千風かよみしハ、実修行体、かれハ世を捨、某ハ又世に捨られてあちきなく、くるしき事に大井川、何と駿河の不二の山、高イ卑イもおしなへて、栄へ衰ふ飛鳥川、移替も面白し、今日悪けれハ明日ハ又よかるふ物と我ながら、心一つにたのむな□、いつ河崎の定めなき無常の鈴の森過て、行程広き日本橋、爰かお江戸の真中と(六ウ)聞及しハ物かハ、ヒントはねつる髭男、六人乗物三挺道具、五本宛ハ朝六つから夜半迄、此橋に絶る事なし、さすか將軍の御下程有て、口の横に切たる者、一時もひたる目にあわす、盲ハ杖を便りに錢を貰、響ハ腕をたゝいて米を取、腰引ハ珠数や木地やに抱て鱈(はたら)を引かせ、

手なき者をハ八百屋に抱て麩を踏する、何れそれにすたらぬ所、是繁昌のしるしそと思ひつゝけて思案橋を渡り、不思
 案橋に銭たして、うそと実の堺町、櫓太鼓の音、□から□と耳に入といなや躑（カ）も地に着ぬ心地なるに、扇口にさしあ
 て、始まった□三番三ちや□、御上覧の太夫土佐ハ是よとうめき立れハ、又歌舞（カ）着座にて、評判しや□、大磯の
 虎に成ますか萩□沢之丞、中□、和田義盛にハ西国兵五郎、五郎時宗に（七オ）市川団十郎、朝比奈に中村伝九郎、
 それ□工藤左衛門に山中平九郎、しきり□と呼ふもあり、扱小芝居に、声立て、今度越後国より腸持（カ）の雪女、
 勢（カ）か八尺、年ハ十六、髪ハ白、黒い毛か一筋もあらず、銭□らぬ纒四文しや銭ハ戻りと□品（呼マタハ叫カ）ハ京も大阪も御当地も、言葉
 の花のうそのかわ、実なしと思へ共、人の多い故かや、朝から晩まで、小芝居にひしとつまらぬ事もなし、あなたこな
 たのいひ立、絵看板の面白さにうつゝをぬかし、足本より鳥の立も覚えず、旅の姿のふつゝかに、地の風俗にうつらぬ
 ハ、横目衆に見咎目られ、宿ハいかにと尋らるゝに、元より無宿のとらへらるゝといふ事をハ、うろたへたる氏神も御
 存有まい事なれハ、京都より今日当着致、未宿も走らすと、何心なく答へけるに、（七ウ）先こなたへといはし有て、
 八幡親のはちか、勘当といふ一言に、ぬけ句のならぬ仕合、終に□橋の揚屋に召籠られ、ケ様の体となら芝の露とあ
 らそふ涙に余所の袂もぬれ申さう、二の次あらまし様子を聞、問も語るも色の道、同思ひのうさつらさ、品おかしきも
 う□取重ねつゝ、秋の夜の長き夜あかぬ物語、互に咄し明すへし、シカン爰てハ耳多し、山神の拝殿に行、ゆる
 りと打解け、一昔の悪姓をさんけして、無量の罪や□法に、神□いのりをかけまくも、かしき人にも□はつかし
 の森の下風そよ□と御□の陰に鼻□き□二の次扱□某都ハ四条通に住して、富ハ家居のつき□しふ、
□甘間口の見世一はい二□并（橋鳥カ）て琴の細工、唐木ハ蔵にみち、猫の形見□棚に余る臺所に、精（カ）の山高、
 日良の暮雪をあさむき□二（二字分）（ハオ）の諸白半切にた□へて、さなから近江の湖の如し、摺鉢の響き平等にして、客
 人の絶間なく、召仕の男女合て六十一人、本卦かへりの分限者と指さ□れるに、もつけや我か売買の引方とて、物こ

しにも悪からぬことのハ^(松カ)風通う爪音も、よき中のむつ事と思ひよりしより、三味の音しめの止間なき嶋原の風景、笹霞に空焼き、烟ハ軒端をもれて雲井になひき、魂いうはふ色の湊、其比丹波屋の大江、いはらきやの玉かつら、是等此里に於て名取の太夫、そのハはりのつよき事、酒顔童子か酒ふりに等しく、綱に引れて腕をとられし羅生門の心中もかくや^(二字分)いかなる辰巳上りの大尽も此米^(よね)におふてハいかなく、二の句出ぬと評判せし程のいきほい、中にもいはらきやの玉かつらに、情をかけし、生ての契りハ童宮城の堀井の底までと深^(ハウ)、死てハまた九品蓮台に互い違の御手枕を願い、凡一月卅日を廿五日ハ揚屋を居宅と定め、常に訪う末社の臣、鉦^(トウ)の八兵衛蛙の三助、蟹長吉、率都婆姿権八、押せへせ六五右衛門、焼餅太郎助など、洛中に腕をさする男達手、天狗のさしみ、かミナりの玉子、白骨の白あへ、鯨の丸焼にても、被下次第な奴原、或時揚屋一座に於て、玉かつら、是等かいきほいを見てさり共つよさうなお様たちあの白わひの、こわい事よと笑う品しほらしき口本に、飛助共気を折て、貴様何ても御好次第、つよい事して御目に懸ん、鉦の八兵衛ハ此柱を片手ニて引拔ンといへハ、蛙の三助ハ一時に堀貫の井戸を七ツ堀て見せましよ、卒都婆懸んなど、^(九オ)所に焼餅の太郎助す、み出て、さらハ旦那にもつよい事させませうとて、小判百両宛香合十二はい盛て、太鼓六人、揚や夫婦、禿遣手迄十二人の華に出す、是程物の見事な男達手に力すくに及ぬ所といへハ、さしものあはれ者も、からくり人形とひとしく、物いはずに打うなつき、頭を疊に付て、めくる事水車の如し、兎に角、世間に金程力^(たカ)のつよい物ハあらすと、自慢の八百もいふて、限なくのはす鼻毛にハ、やもめ鳥もつなかれ、唐芋程なる涎をたらして、雨にも行、風をもいとはず、通ひかよふ程に、九十九夜をニツ重ねし二人寝の内に、ちより^(ろ脱カ)二千貫目の身代を^(たカ)きあげ、揚句の果にハ代々家に伝はる秘藏の珍物、小野の小町か廻文に、

きしひこそまつかみきわにことのねのどこにハきみかつまそこいしき^(たカ) (九ウ)

此歌によって、君かつまと名付し琴一面、小町か一代手にふれて、関寺の門前に袖乞するまで、身をはなさず持伝えけ
 れハ、宝ハ身のさし合、まゝよわさくれ、明日死うも知れすと、うハ氣にまかせ三十貫目の質に入て、其銀を一月程の
 内にいはらきやのたのしむになし、角て家財も次第に干へりして、質に置や否や流の身、うかれ遣いのやるせなく、今
 ハ家に残る物逆ハ、二斗焚の大釜二ツ、五升入の通い樽五ツ、宗和堅地の朱椀そろへて百人前、真塗の長持、定紋付の
 皮つゝら二荷、小袖たんす、懸硯、南京のさし皿、いまりの神酒徳利、備前焼の摺鉢まで取集め見れハ、入札にして
 纒四貫八百廿四匁三分一リンと相場をたて、所帯道具有限売払ひ、此銀を一分も残さず下口の養いに仕尽し、今ハ手
 と身と紙子一重に成て□（十オ）□ハ親類にも見限られ、近附にもうとまれ、所の住居なりかたけれハ、一先江戸に下
 り、しなれし琴の引方にしたかい、何方へも手間取に出て、随分骨を碎き、立身の種をもまき、今の恥辱を雪ん物をと、
 齒切をして立出けるか、都の別れも今日を限と思へハ、一たひふミそんなるいはらきやの名残未尽せず、せめて立な
 から成共、かつら木におふて、今生の暇乞せんと切編笠に貞かくし、黄昏時にまかきにいたり、禿の友弥を呼出し、耳
 に口をよすれハ、早う心得て、内へ入といなや、みすの追風にハあらねと、ふうハりと開くかいとりのつまより、若木
 の伽羅の香をふけハ、すハや心の乱髪、もや／＼と成、腸持の翻財天も是程に出来ましと思へハ、俄に七十三匁ほしく
 成て、君かつまの琴を、悔と帰らす、か（十ウ）つらハ格子にたゝすまい、こハ先とふしたふりて御さんす、心得ませ
 ぬといふ、二の次、泣面作、はつかしなから、そもしゆへに、身代ひしとたゝみ挑灯、火をとほす了簡もないわいの、是
 みてたもれ、かうしたなり、夢てハないか、更にうつゝ共思はれず、ふびんと思つてたもれやと、紙子の粘の解るま
 て、男泣にめそ／＼すれハ、時にかつら、長烟竹搔喰へにしなから、ツントしたる顔ふりニて、是申シ二の次さま、是
 ハ三ミな仰、そうなり果て給ハ、私故との事なれと、それハ大きな了簡違ひ、到らぬ家暮のつゝけ買、末もとをらぬ物
 故に、跡先しらすにのほりつめ、しや（二字分）ろくとのミ心得、石の遣ひ様もしらす、おりはのわろき双六□で、奴よ

り浅ましく、今くい／＼となき給へハとて、本の(三・五糶)し返しもなるまい、返らぬ者の負くしいひて、曲(二一オ)輪(二字分)追廻しに逢んより、早う逃ていなんせ、三味線に張□ハ薄か、こな様ハ厚いついらの皮て、よふも／＼其形をも恥す、此里へこさんした事の、そんな客ハ女郎の風下にもいやてあんす、さらハといふて立所を、二の次しはしと詞を懸け、いかにや／＼玉かつら、流つたなき身なれハとて、物の哀れはしる物そ、夫、男の身ハ、七ころひ八起とて、一度ハ栄へ一度ハ衰う、一の裏ハ六、大晦日の明ル日元日そかし、角落ふれたれはとて、そう人を見をとす物てハないそ、頼朝殿ハ伊豆の北条、蛭か小嶋の流人となり、うきかんなんに月日を送、小銭つかふ様もあらされハ、時々煩悩の起る時、手篇に上下を着せて書るゝ程の貧仕合なれ共、後にハ天下一の親方にハ成給ふそかし、我全盛の光、はつ／＼と小判て顔をはる時ハ、渡辺に手をとらせたる(二一ウ)茨木やの亭主も、あたまで庭をはき、揚屋夫婦の客おかみ、またそもしハ新枕の時より居膳のしかけ、鴨の入首、鴛の羽返し、堅にも横にも相撲の手、御望次第の川津懸、茶臼になりてくる／＼と、座敷の内て廻られしか、今曾我殿より浅ましくなりたれハとて、犬の小判を見る如く、そしらぬ貞社にくらしけれ、ム々此上ハ口に手を寄ていふ程損しや、それかし君となれそめて、末の松山酒ハこす共かわしと、かたみに指の血をしほり熊野の烏紙をかのに染たる罰ハいかに、其心からハ起請社今ハあたなれ是／＼早う返て給という、かつら完爾と白歯を見せ、それ常穿の焼手逆、(二一七糶)手の外にいろ／＼のならい有、先起請ハ傾城の湯漬□(五・五糶)くろ、生爪やきかね、いかほとしても微(二一オ)「(五・六糶)たらぬ事、是皆色のあきなるなれハ、客の望に(三・一糶)心にそまねと面向、実なふりして甘からする、然るを世界のあほう共、かたしけ涙をねち切て、はたかになるもしらま弓、引かれて来るを(二字分)から矢よりも早く取落す、されハ我か身十四の春、水揚して、今十九の冬まで馴染を重ねし大尺を見るが内に、乞食にする事廿四五人かと覚え申候、さありとて亦みつからする故にあらす、銘々の不覚悟にて、大切の金銀を打捨、家を売り身をしつむ、しかも其金は、皆揚屋親方禿遣手か徳分となれば、

いかな／＼琴爪のはし程もわしか為にハ成ませぬ、さあ／＼二世のちかいの文御望なれハ戻しませうと手をたゞけハ、
 禿来るを、其手箱をと取寄、蓋を明て、一枚／＼くり返し「二二ウ」見れハ皆客より請たる誓紙なり、凡番数五六十枚も
 有へし、其中かかたさまの御手ハ是かとして、くる／＼巻て前へ投を取て見れば、我か安房草にまかいなし、さても／＼
 水くさき心中、角まてつめたい物かと、血眼に成て、いかにかつら、過つる文月七日の夜、命にもかへぬ大切に思へ
 と、そちか所望に依て、しハし豫置たる小野小町か深草の少将より貰し松かけといふ琴爪有へし、今歸してたもれとい
 ふに、かつらかくせハつミよ、恥をいはねハ理が聞えぬ、されハその小町さまの琴爪ハ、頃日吉野屋の道芝との齒黒の
 祝とて、傍輩の女郎たち、祝儀物を送らぬす□我も似合にやらねハならぬ折柄、黄成物ににくまれ（五・四纏）れハ、
 先是をも身の差合と思ひ、取あへす九（三オ）十（四纏）入れました（三字分）さんせと、右之手箱より質（二字分）を
 取出し、ほしくハ受ていなんせと格子の外へ投出す、さり共かつらか今のしかた、憎や／＼つかみ殺してくりやうと思
 へと、格子を隔つる口問答、川向の喧嘩にて、手を（二字分）もとゝかぬ仕合、せめて銭百あらハ、貞をはつて戻りたい
 事かなと、しんの焰にまかきを焦し、泣／＼そこを立出て、志賀唐崎の一松、たゞつれなきハ人の命、なり下りたる
 無宿の流の身社あはれなれ（三行あき）（二三ウ）」

捨小舟下

つなかぬ舟聞て打うなつき、さも社あらめ、世の中のうさもつらさもかなしさも、皆色よりそ起るとかや、貴殿の只今咄さしかつらか仇情、聞も中々いやらしや、しかし傾城といへたとて、皆不心中にも有へからず、仏の世にも鬼か住、聖の世にも盗人あり、白米の中にも自然と赤米のましりて有如くなれへ、多の遊女の中に、一人や二人やハ水くさき者も有へし、いて某か因位の昔、破家はびのある程尽たる手くたをそつと語るへし、扱も僕都ぢうがれハ御幸町通に住ンて暫書籍に眼をさらす、爰に佐々助三郎といへりし大活の文人なと、出合の(二字分)さ、一ツ椀の物をも喰ふ程の馴染深し、或時、助三見え(一〇纏)いふものをハ編しと思う、然らハ(一四オ)「(一〇纏)の景色をも艶詩に作りてかふへし、歌人ハ居ながら名所を知るといへ共、西行法師ハ歌枕を尋て路吟せし故、取分名所の歌ハ功者なり、更科姥捨の月も、其所にいたらねへ、よくうつらぬ者そかし、就夫我一人行ンも徒然なれへ、貴丈を誘引て諸共に遊地のもやうを一目見て来て楽むへしと言葉の花の盃を、互に汲てゑひもせず、京にをりての恋のいろは、ちりぬるをわりのわるい咄を、そつと語り申さん、扱もよい目に近江屋のよし野といへる太夫へ、天の羽衣稀にくる、天人の迷子か、探幽か極彩色の衣通姫も、是にいかでと思われ、手ハ小野小通こよこみちにまかい、引手になひく爪音にへ、かゝやく日の宮もけをされ、日本ハ錦手の椀猪口を見るやうに、さてとこもみやらの見事さ、二口屋のまんちうを、かミそりて姿割たる如く(一四ウ)、「酒ふりに出合(二字分)は楽み(二字分)て手をして退くはかり、其外天然微妙のつとく〜にいうも口多なり、かりそめふしになれそめて、次第に阿房か頭へ上り、奢か鼻の先へ出れへ、紗綾縮縞ハ重くて着悪し、ふしぬぎの羽衣をすみる茶に染て、紅葉(もも)ハけはくしけれハとて、両面に仕出し、鼠繻子を裏返して、二寸幅の帯、印籠ハ東山の時代を好、印伝ハ下ひたれハとて蜀紅の錦の上に百芭蕉を一重きせたる切巾着、十匁玉のさんこしゆ、養卜か下絵に、やミの夜になかぬ鳥を二ツ三ツ白染に

てとめさせ、金鏝も何とやら一向宗のお阿弥陀のやうに光過てうるさしとて、黒染にて塗かくし、伽羅も塩釜ハもたれて聞にくし、松風のしやんとして（二字分）よし袖香炉にてとむれハ、烟臭と四敷二間の居間を（一三糎）にいんすの獅噺を居、枕程（二五オ）（一三糎）らかしけるハとつと昔の毛（三字分）花帳の内にして李夫人に手向し反魂香のいきほいも、是にハそと大成者の有程を尽さはひくも道理、彼の君ハ、よし野漆の如、ひつたりと付てはなれぬあんはいのよさ、此世もとんほかへりするように有ける、かゝれハ混色道に魂をとらハはれ、心にこゝにあらされハ、聞共聞えぬ親の異見、みれ共みえぬ煩惱のやミ、我かおやちも若い時ハうまい事を仕尽てのあけく、夜食のかたまり玉子と成て、うかぬ舟といふ目鼻を付て、既に七才の時、世間の子共ハまたかゝ様といふて乳首をひねる時分、物を書習へ、よみ物をせよといやな事は教えつニ、適々辛苦の気はらしとて我か古郷を尋れハ、せまい事をするやうに、折檻有杜いやらしけれ、それ遊君の有るハ天下繁（五ウ）昌のゆへぞかし、先都にハ嶋原なへて石垣丁、祇園八坂清水坂、こつほり町土手町、稲荷北野さか岡崎、伏見に泥町しゆもく町、墨染京橋浜の茶屋、奈良に鳴川木辻、大坂に新町道頓堀、新地堀江藤のたな、夜な／＼辻に立やすらふ、惣嫁の数々千無量、堺にハ夷嶋、大津にハ芝（り）町、播磨に室のつ、うつら野、長門の国に下の関、備後にハ鞆の浦、長崎に丸山、筑前にはかたのつ、越後に村上、新方、越前につるか、みくに、加賀の国に宮の越、上野に坂本、かるい沢、駿河の国に阿部川、三川に御油赤坂、伊勢に古市鳥羽の湊、さて又江戸にハ吉原品川千寿板橋新宿護国寺、丸太舟の寄所ハ八官町、赤坂五郎兵衛丁、めつた（八・五糎）蔵の近辺、此外夜多嫁の隠家芝（二三・二糎）是そ君か代の久しかるへき（一六オ）（一二・八糎）松の位を太夫と定メ揚（五十三叙）ト判読可能（八・五糎）廿五叙といへと、卅叙払い、鹿ハかこい十七叙、月ハ一ツ巻叙、陰ハ二つ式叙、塩ハ三つ三叙、分ハ五分のはし女郎、京大坂ハ是に定め、江戸ハ太夫を三十七叙、格子女郎廿六叙、讃茶ハ一角、うめ茶も同し、おかくら仕舞、うくみす一羽（うくみすとハ、二朱判の事を云、五寸をハ通しゑりという、三寸をハ半ゑりという、二寸を袖へりと号す、近き比まで四寸をゑりかたといひて有しか、

今ハ絶たり、かしはたを田地持と名付、羅生門を一匁と定め、貴賤老若是によつて心をはらし命をのふ、されハ吉原五丁のくるわに於て、一日に五十貫目入来らねハ、其日の口業ハならぬとかや、されハ遊君ハ元氣を養ふ万病円、錢銀とあらは契り給へと多て口にまかせ、固おやちをいひ込しも、今思ハハもつ(二六ウ)「たいない事よ、角て弥性根を迷ひ、仇名よし野にほたされて、命も何の絲瓜の皮、瓢箪よりかるき世を五厘二毛共おもわす、適宿に独寝の夢も揚屋の床の内、現ならぬ有様なり、されハ世俗のたとへ事、いやといはれぬ口すさミ、夫の心と夏の酒、一夜に替るといふまくれ闇屋の太夫千とせといへる女郎にふと魂を入替て、よし野か事をハおくひに出さす、はら立といふ斗にやみよしの恨ありあけの、月に村雲花に風、それかあらぬか中言か、とふかこふかと身をもたへ、しんきな事とおもひねの胸に手を置按すれハ、身にあやまりハ、なけれ共見限給ふ心根の奥をいかにと問ハまし、逢えは見た(三糧)抱てねたやと恋衣、きて見る事の叶ハぬに、せめて(一二糧)やと、曆もとぎの文を送れ(七オ) (一一・五糧)取上もせねはいと、恨ハ増鏡、曇らぬ心よし野の君、是よりいかな世の人に、枕かわさし物させしと、心一つにおもひ定め、身揚りをして客に逢ねは、轡夫婦の折檻、目もあてられぬ有様也、ヤア大胆成ふんはりめ、あの舟はかりか大尺ニて、外の客ハ銀てハないか、是てこりよとふとも、へ、小刀針をさゝれ、或時ハ、食止に逢てうき目にあへ共、ねんげもない事、外の客ハ戸帳を開くまでもなし、盃事もいやてあんす、とてもにさまゆへに死なハそれまで、過去生よりの悪縁にて社あらめと、心中かたくみさほを立、頃しも五月十五夜の月すミわたる西の京、二階座敷に只独、今宵限としらま弓、引音によハる三味線の、いとおしらしき取成に、白むく二つ重ねきて皆水精の珠数を(七ウ)「すり、いかにや、く仏たち、此世社浅き契て侍ふ共、来世ハ必舟さまと、一ッ蓮に向へとり、妙法れんほのかたらい久しく導き給へといひもあへす、拘刀を以、心本へ突立、夕の露とそ消にける、アツといふ声ね耳に入て轡夫婦二階へ上、引立みれハ、是ハさて、雪をあさむく白小袖の血しほにまかへて、出来たてのまんちうよりあたゝかなりしはたへ、忽氷の如なれハ、さすが邪

見の親方も、もみ紙もふけぬ涙にしほりて、かたはらを見れハ、書置有、情なき轡を始、姉女郎遣手禿まで跡々に文を残して、うかぬ舟へも一通を止む、おろせか方より早々届けれハ、さも心つよかりし男、俄に我をり涙のつら、ねち切る斗に覚えし、さて、書置を□（二ハオ）（一〇・九糧）に余る玉章を送る、すんと陸奥のちかの塩風あらぬ方になひき、御ちきりも幾久しき千とせさまとやらんに命をかけさせ給ふとかや、聞より恨有馬山、いな仰を聞まゐらせ度、筆のたよりに気をはこばせ、あわれ一□□^{くたむ}りの御返事をたに、うハの空なる風も猶、まつにかひなき木木の有にあられぬうき身のほと、少も御しんにかゝり候て、なき跡にてふひん共思召下され可候候、過にしきさらぎの比にや有けん、難波折の多葉粉入に歌を書申やうにとなよか成仰いなひかたくて、

君ゆへによしのたはこのよしや世の烟ともなれ身ハいとハしな

とするし置候へハ、そのたはこ入、そもしさま御命のあらんかきりハ身をはなさしと仰られし、おかしく社思ひ候しか、あくる夜、扇（二ハウ）^一やのうき舟さまの禿に給ハりしとて見まゐらせ候事、かくつたへまいらせ候も、はかなき心つくしと思召も有へけれど、思う事はねハお中かはると聞からに、うらみも恋も残り江の、つもるうたかひはらさん為のせいしをはなせにほくとハし給う、うらめしや君ゆへに、此世のみかハ、めいと迄、重くうき目を三津瀬川、恋の淵瀬の底ふかく、しつみ果ぬる身の上を、みしものと思召、思ひ出させ給ハん折ニハ、念仏の一反もとなへて下んせ、ざりとハよのかたさまの百反より、実くうまくうけまゐらせ候、けにやなごりの捨小舟に、うかれし君をしんしつに、いとしとそ思はかなさハ、磯の鮑のかた思ひ、花のつもりの藻屑草、書あつめまゐらせ（三字分）き事すみの江ハうかめかたありながら、御覧（一二糧）の涙にまきこめし、扱申（一九オ）（四・五糧）れし身より（一行分不明）うかぬ舟、此文をくり返して、十方ハさておき廿方にもくる、斗に思ひ、一度双飛の孔翠の契外のやうにハあら磯の、みるめの世間もつ、ましく、暫ぬれの虫干して、五月半より水無月の末まで里通をやめ、心を古郷に戻して、終日閉門、学問の工夫を費さんと

思うに、去者ハ日々にうとく、うつろふ者ハちよつとわすれかたく、後より貧乏神か追立ハ、ちりけ元かそふそふとして、自然と宿に尻のすはらぬ様に覚え、兎角彼の千とせを請出し、一生のそひふしにせはやと思ひしか、乍去、流の身引手余多にしけゝれハ、心ハ千々にうつろひて、底の心ハ汲かたく、いさや事を次てにきやつか心中をためし兼々我にいひかはせし詞と胸（一九ウ）」と替らぬか様子をそつと伺ハんと、自からやつす□姿、十日前より髪をそらす、ほうく然とこしらへて、立売風の髭男、挾箱を持せけれど、耳と口との相図シて、小宿に忍はせ置、我身ハわざと引解よや、河内木綿の肩裾に色紙短冊当たるを着て、なりひらもつくりわす、畳のへりの細帯に、煤竹色の編笠を前うつふきに引かふり、揚屋にすつと入しほの、目はしのきいた亭主かゝ、此形をみるからに、是ハとふした御略（やつ）し、一手くハする分別か、先こなたへといふまゝに奥の座敷にとくく」と、千とせハ久しく音信も、たへてなきさのあま小舟、波にゆるるゝ風情にて、のつしと上座に進しハ、人の命を鳥辺山、骨ハ（七糶）忘れしと、既に押へさハりの盃終て、（中央）四糶（トノミ）中に成（二字分）いひけるハ、なふ聞てたも（二〇オ）」（中間）五糶（一字残ル）とハし思ハれそ、寔ハ（一〇糶）なれ、いつ比までハ随分と手仕脚にてまかないし、果ハ死一倍も借尽、最早此上ハ、分別袋の底を払ても身ぬけハならず、首くゝるより外の事なしと思へと、□死てもほいなし、就夫、日比たかに契置て、死るハ一所の兼言を、定て忘れハし給ふまし、いよく替らぬ心ならば、今宵是にて差違へ、同よみちに行道の、三途川をハ手を引合て、渡るへしと物いふ貞もわかぬ舟、うかぬ体にて語るにそ、千とせ心にあきれつゝ、扱きの毒な様子やと、胸か土佐踊すれ共、しつと氣を押しつめ、完爾と笑て申せしハ、只今の御伝へ、聞より笑止な御事と思うに付ても女子の身、ちえ才覚に及はねハ、此上ハ力なし、左程に思い切らんせハ、元より兼し一言の何いつはりもさふらわん、いさ（二〇ウ）」諸共にきえはてゝ、後の契をたのむへしと、心中たてたるかハゆさに、舟心よく打ゑみて、あゝうれしやな、いさゝらハ此世の限、是迄なり、互の貞を能見やと、其まゝむくと起上り、懐中より相口を取出し、千とせか胸くら抓寄、已にかふよと覚えし時、千とせしは

しと詞をかけ、なふまたんせ、舟さま、さなきたに、女の身ハ五障の雲にさそハれ、三従の罪深しと聞參らせ候へハ、最期のいとまをたひ給へ、念仏の一反も申たやと望けるゆへ、然ハ、心静にとて、刀をおさめ待けるに、其時、千とせのひ上り、西ハとち、東ハいつくと尋るふりして、蚊帳を颯て逃出、やれ人ころしと呼はりながら、屏風けたをしはしり来れハ、揚や（九糎） 棒ちぎり木を持て、あますなもらさし（二〇糎） 相（一・五糎） 声にけてんしておし（三二オ）（一四・五糎） し取て鉢巻にしきせ（九糎） 二人三人取付、あんとけたをし、はいふきふみかふれハ、座敷ハやミのうつゝ心もなく、あゝ笠に火を付、ぬくい紙をしそくにし、可笑事をするかなる不二野にぬる五月闇曾我の夜討にさも似たり、其時うかぬ舟、大名の火にくはつたるけしきにて、微塵もさハかす、是々揚屋夫婦、其外相客の衆中、聞て下されよ、某今宵參る事、別の事にハ候ハす、内々千とせとなしミ深、日比に替らぬ心ならハ、ひそかに身請して、我か宿の妻と定め、出入の人ミに御新造と仰かせて、春ハ花秋ハ月よと詠めんと、おもふ心そこあなき、千とせか心中ためさん為、（二字分） 身をやつし来りたり、深き所存を是みよと、懐中したる相口を投出す、人々立寄手に（二一ウ） 取上見れハ、実ハ櫓の木のあらけつり、銀鍬をしたる斗なり、扱、隠し置たる小者を呼寄、挾箱のふたを開けハ、今極の小判千二百兩入てあり、揚や夫婦を始、なゝある女郎禿遣手に到るまで、是ハしたりと肝をけす、千とせか心、此時ハ、浦島太郎か玉手箱、明てくやしき思ひにも、まさりて社ハ見へにけり、此沙汰はつと曲輪中にかくれなく、太夫職ひてりになり、露うつ客もあらされハ、それより茶やに追さけられしとなり、角てはうかぬ舟、煩惱の珠数を切、アゝおもわすも茶かされて、やきてをくひし無念さよ、薪を負て火事場に行キ、車を引て氷の上を渡共、傾城に契るへからする一日（二〇糎） もてなしける憩立に

（二〇糎） あそひ今日限そと心誓文をたて（一四・五糎） 里の名残とおもへハ揚や（三二オ）（一四糎） を振舞へしと明

さより
鱈くり
ほうつき

ふくさ
青さき
汁午房
榎たけ
かいわりな

かすつけ
香物
みそつけ
ふり
な豆

食

二

汁すき
の水前

炊焼
あわひ
玉子わん

ひたし物
人參
つまみ

三

汁つみ入
たこの
卸たいこん

おほろたうふ
なす
花かつほ

わさひ

引而

焼物
小たい
かけしる

筍
堀竹子
しる竹
玉子

さし
ミこい
いり酒

吸物
花いか
梅干

肴
たいら
すき

吸物
塩雲
露

肴
くらま
午房
かけし

吸物
めま
まき

水の物
白ふり
大こん
りんこ

(二三オ)

干くわし
こりん
御所千餅

花ほと
大らくかん
かすてら

茶請
ゆき平もち
岩たけ

水菓子
ふり
西瓜

其外美味の数を尽し、六月廿九日の昼より明けハ卅日の昼までのミくらしぬ、已後又難波にいたり、男色女色に心を寄、夜白の樂するかちなる、不二程金をつみて、是てハたまらぬ管よ、終に身代籠の鳥、立居もならぬ様になり、厚地にぬき足して、さしにも広き世間に、ひさを入へき宿さへなきも、人のするゆへにあらす、かたるにつきぬあほふ程、知た同士ハすゝ風のそゝろ寒けき秋の空、既に称念寺の鐘東雲を告、水抜の鶏しきり音つると、思へハ夢ハさめにけりみし

（一〇糰）（三ツ）」